

●佐々成政略譜

- 天文 5 年 (1 歳) 成宗 (盛政) の第 5 子として、尾張 (1536 年) 比良に生まれる。
- 永禄 3 年 (25 歳) 成政、家督を継いで比良城主となる。 (1560 年)
- 天正 3 年 (40 歳) 越前府中、上二郡を与えられ、小丸城主となる。
- 天正 8 年 (45 歳) 上杉勢が越中に侵攻するため、神保長住の援助者として入国。常願寺川と神通川の治水事業にあたる。
- 天正 11 年 (48 歳) 豊臣秀吉に越中支配を認められる。常願寺川の治水事業にあたる。
- 天正 12 年 (49 歳) 前田利家と対立し、末森城を攻める。神通川の治水事業にあたる。さらさら越えをする。
- 天正 13 年 (50 歳) 秀吉、佐々攻めのため越中に出陣。成政、降伏し、新川郡 (20 万石) を与えられる。天正の大地震、焼岳大噴火で神通川氾濫。成政、越中に駆けつける。歌を残す。
- 天正 15 年 (52 歳) 肥後に転封するが、国人ら一揆を起こす。
- 天正 16 年 (54 歳) 秀吉に一揆の責任を問われ、尼ヶ崎で切腹する。

川が堤防で固定されていなかった時代には珍しくないことだったらしい。しかし、そんなふうまく城の北側で、まるで城を守るように蛇行するものだろうか。ここに釈然としない疑問が残るのだ。

さて、天正 8 年と言えば、佐々成政が越中へ入国した年である。一説には成政が川を曲げた、とも言われているがこの件に関してはっきりと

書かれた書物は見当たらない。そこで、成政研究の第一人者・遠藤和子氏にお話ししてみようことにした。さっそくお電話してみると「成政と神通川はとても関係があるんです」という頼もしいお言葉。なんでも、まだ書籍に記していないことが最近分かってきたのだとか。これは楽しみに

馳越

●馳越線 100 周年
記念特集 3
はせこし 100 周年
遠藤和子さんに聞く

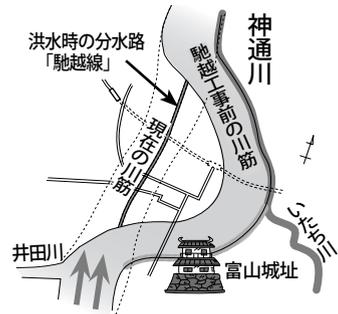
馳越の原点は
成政にあった

成政と神通川



写真提供 / 富山市郷土博物館

「神通川馳越線工事」って何? ~前号までのおさらい~



大洪水を何としても軽減したい

明治時代、人々は毎年のように起こる大洪水に大変苦しめられていた。多くの人命と財産が失われる中、一刻も早い解決策として行われたのが「神通川馳越線工事」である。富山城址北の湾曲部分に直線の分水路を作り洪水時にはそちらへ流した。以降、洪水の度に川幅は広がり、本流となっていく。

成政が川を曲げた?

かつて神通川は、現在の富山城址北側で大きく蛇行していた。その湾曲部分によってもたらされた度重なる洪水。明治 36 年に完成した「馳越線工事」は、その水害を軽減させるべく行なわれた明治の大事業である。その湾曲部分に引かれた直線の分水路は、洪水の度に川幅を広げ、結果、そちらが本流となり今日の川筋を作った。さて、この事実を調べていくにあたって、もやもやと湧いてきた疑問がある。それは、どうして神通川は曲がったのか、ということである。一般的には、天正 8 年 (1580 年) の大雨の際に、呉羽山の麓を流れていた神通川が東へ大きく川筋を変え富山城の北側で蛇行した、と言われていた。大雨で川筋が変わる・・・これは今日のように

●なぜ神通川は曲がったのか、そこには壮大な物語があった

馳越の湾曲から成政時代を辿る。

神通に注ぐ川たち

「まず、川を語る時には、その水系全体を見なければなりません。下流で起こっている洪水の原因が、上流にある、というケースが多いからです。例えば、江戸時代における神通川の氾濫の多くは、飛騨からの雪解け水によって起こっているのです」

——神通川は飛騨の四大河川のうち、2つ、宮川と高原川を県境・猪谷で合流し、富山平野を貫きながら日本海へ注ぐ大河である。川全体から見れば下流にあたる富山城下の洪

水も、宮川、高原川を除いて考えることはできない。ちなみに記憶に新しい平成11年の神通川の氾濫は、宮川流域に降った集中豪雨がそのまま下流に傾れ込んだ結果と言える。その時、遠藤氏は世津発電所のダムを見に行っており、洪水時の大激流の恐怖を目のあたりにしている。

「集中豪雨が来るといって皆さん寝ずの番をしておられたんだけど、窓から見ると川の水が想像以上に物凄い勢い、このままじゃダムごと破壊される、というので慌てて水門を9つとも開けられたのです。激流は言葉にならない、恐怖そのもの。けれど、ここで注目したいのは、むしろ高原川なんです」

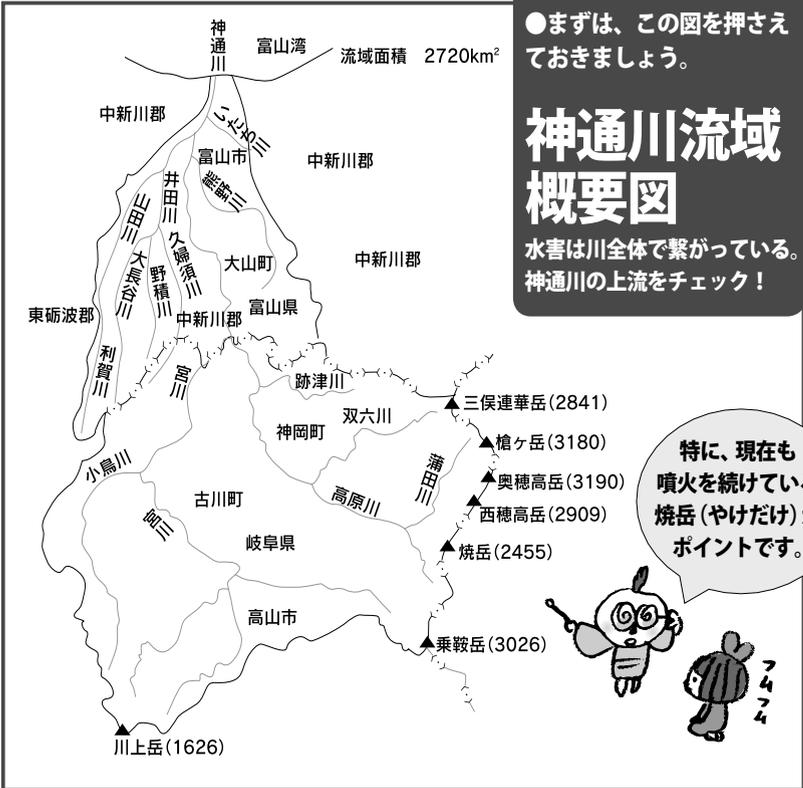
高原川の源には3000メートル級の日本アルプスがそびえ、一帯は急峻な火山帯であるために土質が大変もろい。なかでも焼岳は今も火を吹く油断ならない活火山である。(この焼岳は佐々成政時代に二度も噴火し、神通川の河身を大きく変えている) さらに神通川を切断するように走る跡津川断層(跡津川付近) ほか、いくつもの断層。一方では、利賀村や八尾の山中からもたくさんさんの川が一本にまとまって井田川として神通川に流れ込んでいる。

「このことを念頭に置きながら、今一度、馳越の原点、湾曲はどのようにして生まれたのか、という史実を振り返ってみましょう」

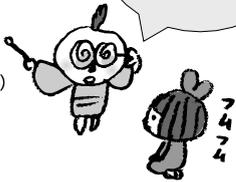
●まずは、この図を押さえておきましょう。

神通川流域概要図

水害は川全体で繋がっている。神通川の上流をチェック！



特に、現在も噴火を続けている焼岳(やけどけ)がポイントです。



越中入国と大洪水

成政が越中にいた頃、神通川は大洪水によって2度、川筋を変えている。入国前は、今よりもっと西側を流れていた。(10ページ地図) ①参照 飛騨方面から伸びてきた河身は、ねむの木で西にそれ、速星駅を目かげるように婦負郡に侵入し、金屋で井田川と合流。呉羽山の東麓をなぞり茶屋町から五艘で蛇行していた。五艘という地名は、船の渡しが五艘あった当時の名残である。

天正8年9月、上杉景勝が越後・春日山城から越中に攻めてくるという報せが入った。すでに富山城より以西は織田軍の手に落ちている。越前・小丸城主だった成政は信長の命を受け、神保長住(富山城を築城した神保長職の息子)を指導すべく越

神通川、いたち川の水をせき止め、
富山城を浮城にした堤があった付近。



右がいたち川。今も石が堆積しており流草をせき止めているのは偶然だろうか？ もしかすると、堤の名残り？

そのまま土手を突っ切って城下町を直撃したのである。戦いのために富山に駆けつけた成政が見たものは、濁流に浸かる富山城、泥にまみれている城下町、茫然と立ちすく

● 八田橋 牛島新町 (84pC-2)

「つる人も ここにそめん そらはれて あらしを残す 川岸の松」前田利郷作 (利郷は正南の第七子) 八田は神通八景の一つだった。



中に送り込まれた。これが成政越中入国の始まりである。「この時に、常願寺川、いたち川が氾濫し、神通川も川筋を変えるほどに氾濫したのです。なんと井田川が神通川を突き破ってしまっただのです」(10 ページ地図 ② 参照) 井田川上流に降り注いだと思われる集中豪雨が、井田川を暴れ狂う濁流に変え金屋の合流点で神通川と交ざりあうことなく

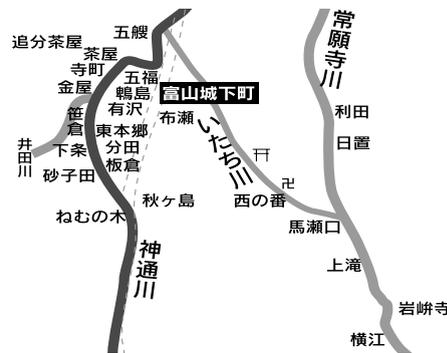
む人々。これから上杉が攻めてくる、という大事な時にこれでは戦にならない。戦う前から負けである。成政は急遽、治水に取り組んだ。「戦いに明け暮れる戦国時代の武将にそんな治水ができるか、と考えられましようが、戦国だからこそその治水なのです。川は城を守る重要な外堀です。もちろん、民衆が困っているのを放っておけなかつたのです」成政による常願寺川の治水については、これまで十分知られているが、神通川については謎に包まれている部分が多い。「しかし、記録に残っていないからという理由でやっていない、とは断言できません。神通川は、外敵から富山城を守る外堀であるからです」

神通川の川筋の変化～成政の越中入国時代～

1 成政入国前

神通川は今より西寄り
婦負郡を流れていた。

点線が現在の神通川の川筋。婦中町ねむの木から西にそれている。井田川と神通川との合流点は富山市金屋の辺りだった。また、五福で湾曲し、五艘付近を流れている。



2 成政入国時 天正8年9月

井田川が激流となって
富山の城下町を直撃

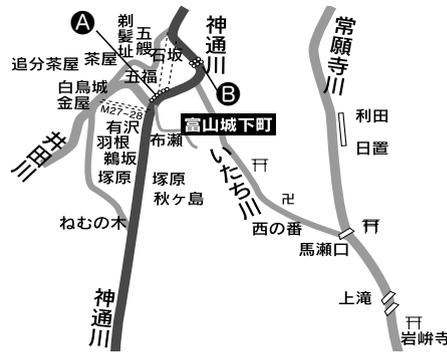
上流で降ったと思われる集中豪雨によって井田川が激流に。何と神通川を突っ切って城下町になだれ込み、当時は今よりも大きかったいたち川と喧嘩するように北上していった。



3 ざら峠直前 天正12年9月

焼岳の噴火で神通川が
大洪水を起こし、直流に。

ねむの木から五福辺りまでの川筋は現在のものになる。この時、成政は A に頑強な石垣堤防を、B にダムを作り神通川を天然の外堀に仕立てた。この時点で馳越線工事前の川筋が確立した。

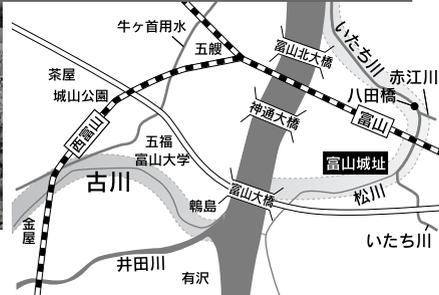




両岸は草に覆われ、水面を鴨が何羽も泳いでいる。自然の情緒が感じられる川である。

●神通川日川筋・古川

富山大学裏を流れる細い川が、かつての神通川の名残りだったとは…知る人はもはや少ない。



何事もかはり果てたる世の中に 知らずや雪の白く降るらむ

●佐々成政の短歌

天正13年11月29日(現1月初旬) 天正大地震直後

富山城址公園内、天守閣の横に句碑があります。

焼岳が神通を動かす

さてその後、天正10年4月、成政は正式に富山城に入城している。そして天正12年9月、前田と戦いを始めた頃。またしても川筋が大きく変わるような天災に神通川は見舞われている。焼岳の大噴火である。神通川の激流はまるで曲がることを知らないかのように、塚原の村の真ん中を通り、直流になった。ねむの木から西にそれていた水流が大きく東に

寄ったのである。(10ページ地図⑧参照)

「当時の人は本当にびっくり仰天だったと思うんですよ。ある日突然村のなかを激流が貫き、新しく大きな川が流れ始めた。塚原という地名は、今も神通川を挟んで2カ所あります。この村の真ん中を突き切ったのです。私は今でも空港の前の神通川を見る度に思うんです。ああ佐々成政のいた天正12年に、ある日突然に何もなし田畑の真ん中に川ができたんだなあ。土地の人たちは

ではないでしょうか」

さて、実はこの次の年、天正13年11月(現在でいう1月初旬)にも非常に大きな天災が起きている。歴史上にも名高い「天正の大地震」だ。岐阜県北西部、庄川上流に走る御母衣(みほろ)断層がずれたのだ。それと連動するように跡津川断層辺りの断層も全部触れ合い、濃尾平野一帯にマグニチュード8.2の群発地震が起きた。焼岳も火を吹いた。しかもこの年の冬は記録的大雪。焼岳の火砕流が雪を溶かしながら迫ってくる恐怖。富山城下は凍えるような寒の時期、地震と大水害に襲われることになった。

「この時、成政は秀吉に降伏して大阪へ行っていったのですが、新川郡領主という自治体の責任者。当然、報せを聞いて越中に駆けつけました。そして詠んだ歌が右上の歌です。自分がいた時は大変繁栄して

どんなにか驚き、腰を抜かしたところ」と

天災の無常を歌う

けれど戦国武将・成政はただでは起きない。この洪水によって変わった川筋を逆手にとって、城の要に利用したのだ。成政は富山城を堅固な浮城にするため、城の北西、鶴島から富山城下の入り口にかけて巨岩を積み重ね、頑丈な石垣堤防を築いた。(10ページ地図⑨のA)人々はこれを「早瀬の石垣(かいき)」と呼んだ。さらに下流の八田ノ瀬には巨木を積んでダムを造り、有事には川の水をせき止め、天然のダムとした。(10ページ地図⑨のB)ちなみに、ダムに使われた巨木は上市町の眼目山立山寺(かんもくざんりゅうせんじ)から運んだという。

「この時の土木工事が、『成政が神通川を曲げた』という説を生んだの

いた富山の城下町が見るも無残に崩れている。それを知らずに雪が降っている。降りしきる雪のなかでの領民たちの困窮を思い、胸を痛めて詠んだのでしょう。神通川や常願寺川の治水事業を通して民衆の生活を守った成政。越中の人たちに政治家として慕われたのも、そこにあるのです」

馳越線工事から辿った神通川の歴史。湾曲に対する疑問から明らかにした成政との深いつながり。馳越の原点には戦国の武将、成政の生き様が、今も脈々と横たわっていたのだ。⑩

遠藤和子さん



1925年富山市に生まれる。富山師範学校卒業後、教員生活のかたわら、創作、童話などを発表。退職後は富山に埋もれている歴史的テーマを掘り起こす。富山県功労賞ほか様々な賞を受賞している。